

ぱつくとうざばすと その34

シンガポールに現存する最古の団地—ティオンバル団地



ティオンバル団地 (1)



ティオンバル団地 (2)

シンガポールは、人口の82%がHDB (Housing and Development Board=住宅開発庁)という団地当局の下にある団地に暮らし、しかも人口の80%が、99年のリースという形で分譲団地の一戸を買っています。つまり大多数のシンガポール人が、団地の一戸を買ってそこに住まなければならないのです。私は、このような社会を「総団地化社会」と名付け、現地資料をもとに社会学研究を行っています。

シンガポールの団地は既に相応の歴史を有しており、政府当局が建設した公共集合住宅を団地とすると、シンガポールで初めて団地が建設されたのは1932年になります。HDBの前身機関で、英国植民地時代に事実上団地当局の役割を担ったSIT (Singapore Improvement Trust=シンガポール改良信託)が、ロロンリマウという旧市内の北縁に建てた一階建ての住宅群です。シンガポールの独立後に取り壊され、現存していません。

シンガポールに現存する最古の団地は、写真(1)(2)で示すティオンバル団地です。SITが1936年から建設を始めた団地で、シンガポール初の本格的な団地と言えます。

築80年近くになるティオンバル団地は、さぞ古くさい団地かと思うかもしれませんが、実際に訪れてみると、古くささを感じることはなく、むしろ優雅さというか気品すら感じられます。各戸の間取りは広くて天井は高く、ゆったりとした風通しのいい造りになっています。

私がシンガポールに住んで研究をしていた1998年から2002年にかけては、団地再開発プログラムの下、古くて素晴らしい団地が次々と取り壊されており、このティオンバル団地もひょっとしたら...と、内心危惧していました。

しかし、それはどうやら杞憂に終わったようで、ティオンバル団地は現在、むしろ流行のスポット、観光スポットの一つになっており、シンガポール政府といえども取り壊せない状態になっています。国土の開発・再開発が徹底的に進められる中、古い建物のほとんどが、取り壊されるか「ヘリテイジ」として観光客向けや文化機関向けにわざとらしく保存されるかの二択になっているシンガポールにおいて、人々がそこに生活しながら生きた形で古い建物のよさを体感できる限られた場所がティオンバル団地であり、このことが人気の背景となっているのではないのでしょうか。

シンガポールでは、ガーデンシティの名の下、政府当局がいたるところに大量の木を植えています。しかしそれは、政府当局が植えたものだけではありません。写真(2)で示すように、団地では団地住民自らの手によって各戸の前にも植木鉢が並べられ、大げさに言えば、団地住民との協働で団地の景観が創り出されています。写真(2)をよく見ると、植木鉢と柱の間に隙間が空けられていることが分かるでしょうか。これは、歩く人を邪魔しないようにわざと空けられているのです。こういう空間の重要性については社会学者等がよく指摘しますが、それを何気なく実現している点に、ティオンバル団地の素晴らしさを感じざるを得ません。

ティオンバル団地を実際に訪れてみると、そこに存在するのは、以上取り上げた戦前の団地棟だけではありません。このほかに、SITが戦後に建てた団地棟、HDBが1960年代以降に建てた団地棟、近年の団地再開発で既存の団地棟の一部を取り壊した跡地に、HDBが建てた超高層団地棟があります。このように様々な団地棟が並存していることもまた、ティオンバル団地の歴史を表わしています。

本稿を読んだ方には、シンガポールへ行く機会がありましたら、ぜひティオンバル団地にも足を運んでいただきたいと思います。MRTという電車の東西線に乗ってティオンバル駅で下車し、ティオンバルロードに出て東へ向かって行けば、やがてティオンバル団地が広がっているのを目にすることができます。

(社会システム学科 鍋倉 聡)